

第8章 メディア・リテラシー学習の事例研究

井上 豊久*

1. 事業の概要

メディア・リテラシーに関する研究は、特に成人に対するものは緒についたばかりである。ここでは、メディアを構成していく体験学習活動を通じ、メディア・リテラシーの能力、操作・発信の能力などではなく特に批判的能力の育成を念頭においた事業における検証結果を示す。

この事業は子どもと大人の双方を対象とし、メディア（ビデオ）作品を実際に創っていく体験をしながらメディア・リテラシーを身につけようとしたものであり、市民団体である「子どもとメディア研究会」との共催で行われた。事業名称は、参加者募集を容易にすることもあり、アピール度を考慮し、「カメラ探検隊！CoCo 1 PR大作戦」とされた。子どもとメディア研究会は、1999年10月に子ども劇場福岡県センターが呼びかけてできた市民の主体的な研究団体である。医療、福祉、教育の専門家や保育所・幼稚園・学校関係、放送、新聞、そして地域の親や子ども劇場などが協力して、子どもとメディアについての実態調査と研究、子どもとメディアのよりよい関係づくりのための実践、そして提言に取り組んでいる団体である。この事業は自主参加の下、5回シリーズで行われたが、事前にNHK福岡の見学とメディアで何をとりたいたいのかという（テーマ、素材、構想を考えてくる）宿題提示が行われた。

第1回目は平成13年1月20日に行われ、前半が鈴木みどり氏（立命館大学教授、メディア・リテラシー専門家）の講演、後半が元NHKのディレクターなどによるビデオ制作実践のオリエンテーションであった。2回目は何をどのように表現するかの説明と撮影と編集の仕方についての解説がなされた。3回目は現場に出るの撮影（ロケ）・取材である。4回目はスタジオを借りての編集作業である。最後の5回目は自主制作したメディア作品の試写会と評価、そして話し合いであった。

全体として参加者は子ども（小学5年生から中学2年生）、大人、それぞれ8人が2グループ、合計32人で4グループに限定した。テーマは「自分たちのまち」の紹介ということで、必ず長短にかかわらずインダューを入れることとした。8人という人数制限をしたのは、役割分担をしてもらい、各々の活動を明確化するためである。1. プロデューサー／番組制作上の最高責任者・班の代表、企画・予算・関係者との打ち合わせ、制作条件の整備、班内の民主的運営・チームワークづくりなど、2. ディレクター／制作現場の総指揮、演出担当、番組づくり上の何でも屋、3. アナウンサーまたはリポーター／インタビューやナレーション、4. カメラマン、5. 音響技術者、6. 編集者、7. 記録係／サブ・プロデューサー、班内の担務と動き、班活動のすべての記録、良かった点、悪かった点、経理も、8. サブ・プロデューサー／プロデューサーの補助だが、実験研究のため欠員が出た場合問題が生じやすいので欠員の際の補充のメンバーでもある。ただし、今回は子どもも大人も欠員は0であった。

* 福岡教育大学教育学部

その他、「子どもとメディア研究会」のメンバーが、各班に付いて指導・援助ということで、相談にのるとともに、指導者の目で記録を行った。

各回について、もう少し詳しく記述する。

第1回は、国立教育政策研究所生涯学習政策研究部の笹井宏益氏によるこの事業の説明が行われた。その後、鈴木みどり氏の講演であったが、内容ではメディアは構成され、つくられたものであり、独特な表現を持っているので、主体的、批判的に読み解いていく必要が示された。ビデオや資料を使ってできるだけわかりやすくメディア・リテラシーの基本事項について説明がなされた。そしてつくる場合の注意点として価値観を押しつけないということが強調され、これから技術的な面で学習していく基礎的事項が示された。しかし、今後の技術面での学習過程でメディアへの批判的思考がすぐに思い起こされることはアンケート結果から示されることは少なかった。この初回の内容については子どもからは「専門用語ばかりでわからなかった」という意見も見られ、かなり理解されやすいように内容を工夫されていたが、大半は難しかったという意見であった。すべて理解する必要はないが、わからないことを適切に質問できるというコミュニケーションが今後育つ必要がある。ただし、他のアマチュアビデオ講座ではすぐに機器の操作等の技術の基礎事項が扱われるのに対して、メディア・リテラシーについての根本であるクリティカルシンキング（批判的思考）が第1回目で解説された意味は大きいといえる。参加者の意見でも「もう一度鈴木みどりさんの講演を振り返りながら、メディア・リテラシーについて考えていきたい。みるのがだめなのではなく、どうやってつくられているかを知ることが必要」がみられた。

次に、1. 自己紹介／名前、学年または年齢、仕事、参加の動機などをひとこと入れながら参加メンバー32人が簡単な自己紹介を行った。2. 企画検討／プロデューサーを中心に班ごとに話し合いが行われた。番組のねらい、テーマを設定し、下調べ（リサーチ）をしてきた素材の洗い出しや点検を行い、タイトルをつける予定であったが、タイトルの確定までには至らなかった。その後、各班に台本用紙を配布（表紙1、構成表1、中身5）し、ファシリテーターが説明した。レクチャーとしてデジタルカメラとビデオテープについて、標準（SP）で撮ること、インタビューの際にはコードを延ばしてマイクをつけること、できるだけ三脚を利用することなどの实际的・現実的留意点も示された。そして宿題として今日の話し合いに基づいて、ディレクターは次回（1／28）までに「撮影用台本」の第一次案の作成が義務づけられ全員に示された。

第2回1月28日はまず各班のディレクターがまとめてきた台本をもとに、みんなで修正して完成させる予定であったが、大人の一つの班は最初からやり直さなければならないところまで進行上戻った。次に次回2月4日のロケ・スケジュールの打ち合わせの予定を書いて実施本部に提出した。撮影や取材のポイントが示され、危険の回避、相手の了解の必要、ローポジションは被写体を見上げることになり相手が偉そうに見えることなど撮影の方法によって表現・伝達が変わることも知らされた。経験豊富な元NHKディレクターが実際上の課題を中心に説明したこともあり、専門用語が数多く矢継ぎ早に使用され、初心者には理解が不十分なまま進んだことがアンケート結果から知らされ、最後の作品発表の時にやっと理解できた内容もあった。メディアは専門化が進んでいる分野であり、深く理解しようとする用語の意味の理解など基礎からの体系的なシリーズが不可欠である。

第3回2月4日は実際に室外の町に出てロケがなされた。実はどの班も一日では終わらず何回も何日も自主的に集まって撮影がなされた。ここでの作業の膨大さ、大変さは予想外のものではあったということがうかがわれる。最終日（3月18日）には「5分間の作品でも撮影に100

時間以上もかかるのに60分番組なんて（もし制作するとなると）どうなるの」という3月18日にこの実験事業の取材に来ていた福岡テレビ放送の記者やカメラマンへの質問がなされた。また、提示されている作品はいかに価値観や操作によって構成されていたものかが実感として理解された。次回2月11日までに撮影したビデオである「荒編集ビデオ作品（ラッシュ）」の試写会を班の全員で行うことが宿題として示された。何度も見直して編集方針を決め、できれば何分何秒までがどんな絵（コンテ）であるかをメモしておくことが示され、あらかじめ作成者の意図に沿ってメディアが作成されることが暗に示された。

第4回2月11日、2月18日は富士ビジョンという民間のスタジオでの編集作業がなされた。編集者と音響技術者とディレクターが中心となり台本に基づいて、それぞれの項目の長さも計算しながら、全体で5分ちょうどにまとめ、音かぶせ、映像かぶせなどもなされた。ここでの音かぶせなどでのメディアからの視聴者へのもっていきかたなどが体験された。

参加者全員は最終回3月18日までに「今回のビデオ制作のイベントになぜ参加しましたか。班の中でどんな役割を担当し、何を感じましたか。これまでのテレビの見方とビデオ制作を終えた今のテレビの見方とはどんな風に違っていますか。今回の番組づくり全体を振り返っての感想は。」というテーマでの作文の課題が出された。

第5回3月18日の最終回では、まずアンケートと課題の「作文」が回収された。次に本事業の共同研究員である井上豊久（福岡教育大学）による事業の経過意見が示され、参加者・促進者（ファシリテーター）の先進的で困難な活動状況結果が示された。班ごとに、番組のタイトルやねらい、「評価」（作品の出来具合や「カメラ探検隊！CoCo 1 PR大作戦」の取り組みの中での班のチームワーク）などがプロデューサーによって発表された。子どもの一つの班では、例えばインタビューの前にも映像を撮っておくなど、後で初めてメディア作成の際の決まり事の意味が分かるものもあり、「わからなくても聞き流していたが、素人がやるのだからもっとわかりやすく説明して欲しい」などの意見が出された。子どもの2つ目の班では実は子どもが実際住んでいる地元の町ではないという「我が町紹介」というきつさはあったが、「不老水」というひとつの事象にこだわった制作がなされた。子どもたちのそこに住んでいる人たちへの関心は薄く、途中でメディア制作活動とは関係ない100円ショップへ寄ったりということもあった。ファシリテーターは継続的に商店街の人に興味を持ってもらいたいということにもかかわらずであり、ファシリテーター自身の興味・活動の方向づけの専門性が問われた。大人の一つの班は10歳代から60歳代といろいろな年代がいたが、それぞれの年齢の思い入れがみられた。1回目で台本、2回目ではほぼ完成という制作期間の短さが指摘され、それによってプロデューサーが暗い表情になってしまっていて、ファシリテーターにとっては単なる作品づくりでなく、メディア・リテラシー講座という位置づけの確認が必要であった。大人の二つ目の班は最初はバラバラであったが、ロケやインタビューで地元の高齢者と接することで活動の楽しさが出てきたという報告がされた。5回シリーズであったが、その他に各班10回以上集まって制作作業がなされたが、途中でやっと全員そろったところで初めて一から考え直したりしたという班もあった。ただし、ここでインタビューでは自分たちの意図に沿ったものだけを取捨選択していくという作業を直接体験することとなったため、その怖さを感じたという。最終回の全体意見の中で参加者である新口さん（大人）は「自分たちの意図に即して、いいところ取りが可能であり、まずい発言はカット、ということがわかった。そのことで、メディアを今後見るときはたぶん人がつくっているとまず考える。正直、やらせも理解できるようになった」と発言した。メディア・リテラシーの基本である作成者の構成への理解が、インタビューされる人の選択やとったインタビューの選択の活動上の必要性ということから実感・理解されたのであ

る。

2. 調査結果の概要

メディアの利用について、あるいはメディアとの関係や意識についてアンケートを実施した。対象者は32人であったが、すべてに回答が適切なものは子ども13人、大人10人のみの有効回答で、合計23人が今回の調査結果分析の対象となった。子どもは小学校5年生から中学校2年生で男子7人、女子6人、大人は16歳から60歳代まですべて女性であった。子どもは毎日テレビを全員が使い、テレビで元気が出たりする場合が多いと回答している。大人の女性は大半が専業主婦である。研究対象となった大人の大半が毎日テレビを使っているがビデオカメラは7割が使わないと回答。対象の大人は子どもに比べてテレビより本の影響が強い。対象の大人の傾向はボランティアへの興味があったり、人と話すことが苦にならないといった心理面でも積極的で交流も比較的得意であるという特徴が回答からみられる。次からの図は以下、2本だけの帯グラフは大人のみ、6本のは子ども大人別そして子どもと大人を合わせた合計の1回目（1月10日配布、1月20日に回収）と2回目（3月8日配布、3月18日回収）で同じ質問への回答結果を示したものである。上の2本の帯グラフが子ども対象、中の2本が大人対象、下の2本が合計を表している。

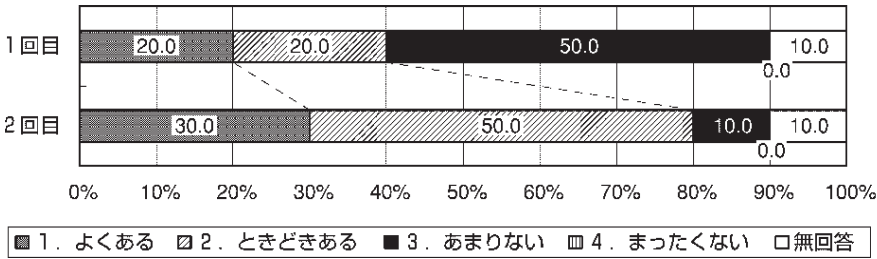


図8-1 本で報道が行きすぎていると感じることがある（大人）

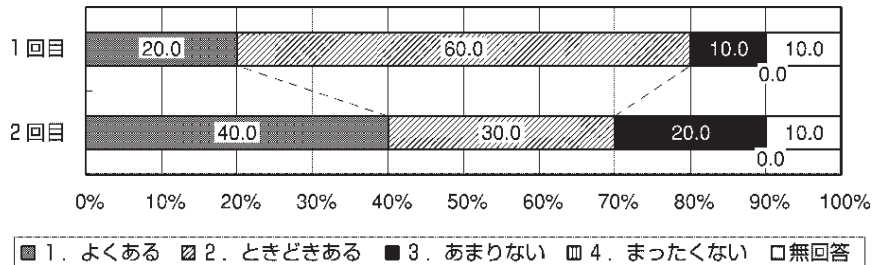


図8-2 新聞で報道が行きすぎていると感じることがある（大人）

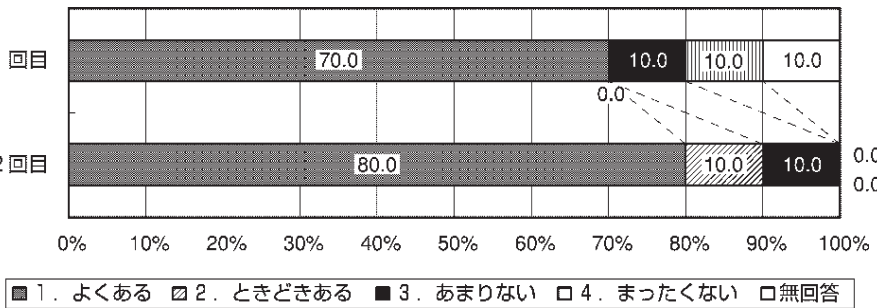


図8-3 雑誌で報道が行きすぎていると感じることがある（大人）

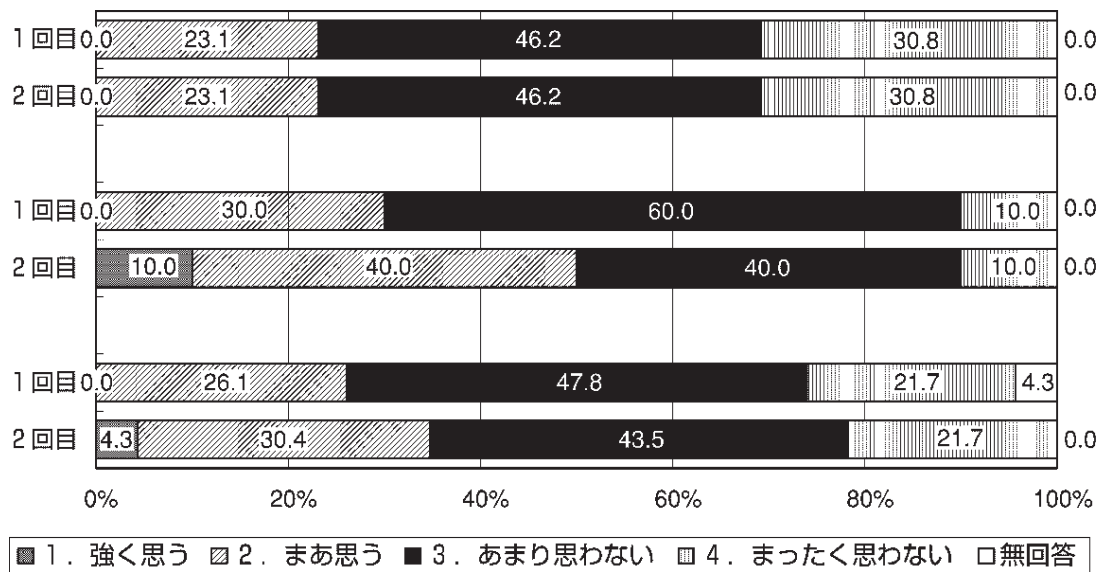


図 8-4 テレビがうつる仕組みについて知っていると思うか

変化の過程を重視し、調査結果を次の6点にまとめる。

第1は、全体として認識や実践意識が大きく変わったとはいえないが、約半数の事項で有意な変化がみられ、焦点化体系化して取り組めばこういった生涯学習事業によるメディア・リテラシー育成の可能性は十分にみられる。参加者の意見で「ビデオ制作したことで、映っている画面以外の切り取られた部分や工夫されたアングルを想像できるようになった。『音を追うのではなく映像を見る』という提示から、インタビュアーの服が同じインタビューの中でも変わったことやドキュメントや情報番組などは何を伝えたいのか探るようになり、それを感じさせない番組もあることに気づいた」もあった。図8-1～4に示されるように子どもに比べて大人の場合、各種メディアの報道の行き過ぎへの批判的視点やテレビの仕組みの認知度が変わってきている。

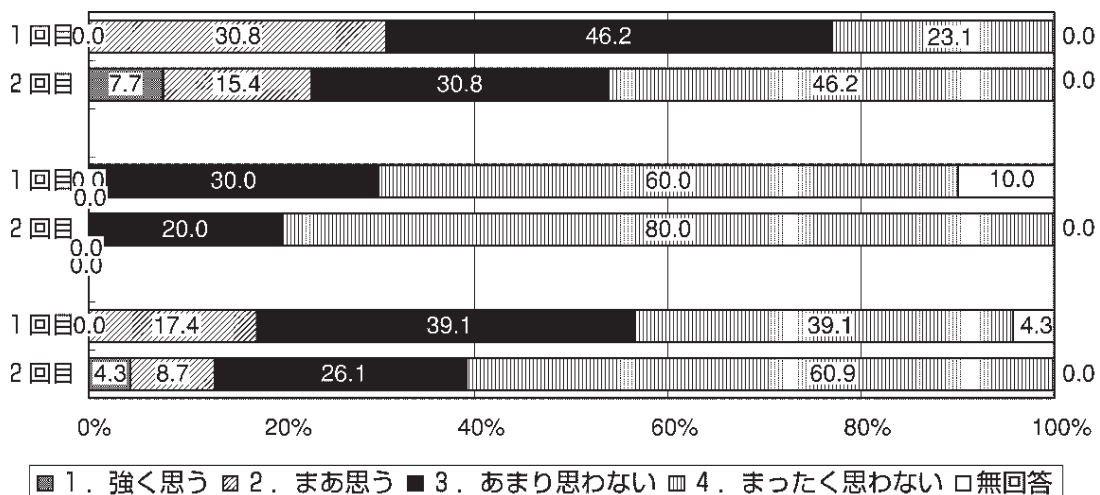


図 8-5 テレビドラマに出てくるサラリーマンはテレビ以外の生活でもサラリーマンをしていると思うか

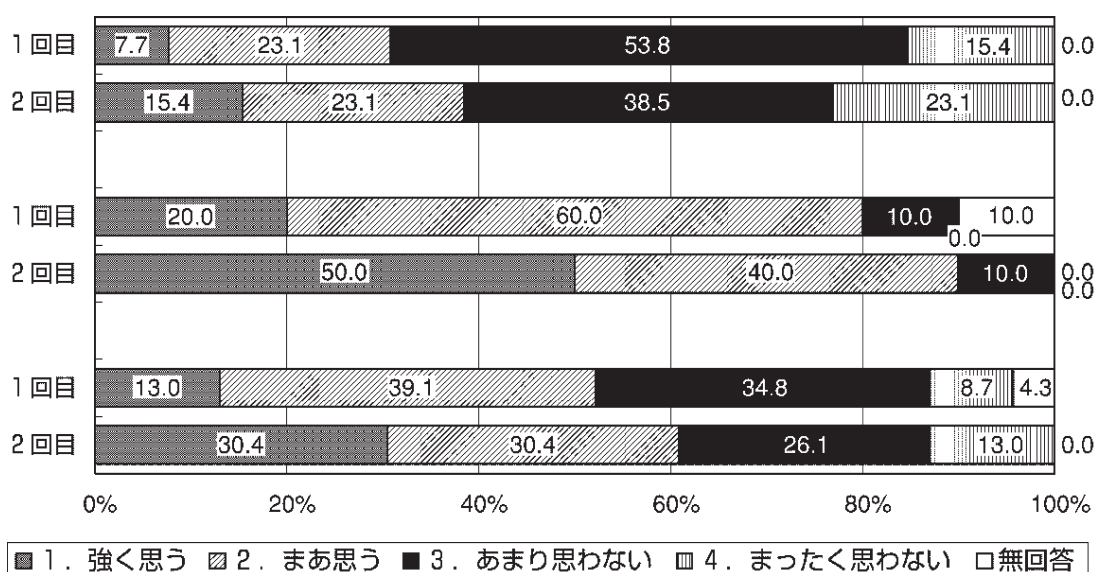


図 8-6 テレビ局などに何か言いたいと思うか

第2は全体として今回のメディア・リテラシー事業ではまず図8-5に示されるようにテレビのサラリーマンが完全にそこだけのものだという認識を子どもは持っていないし、図8-6にみられるように批判的思考及び態度に関しては子どもよりも大人の変化が顕著であり、素材や情報源を深く読み解くことが求められた。こういったメディア・リテラシーの教育における批判的能力育成に関しては、子どもに対してはメディアを読み解くことの基礎理解のための内容や体験等を充実させる必要がある。

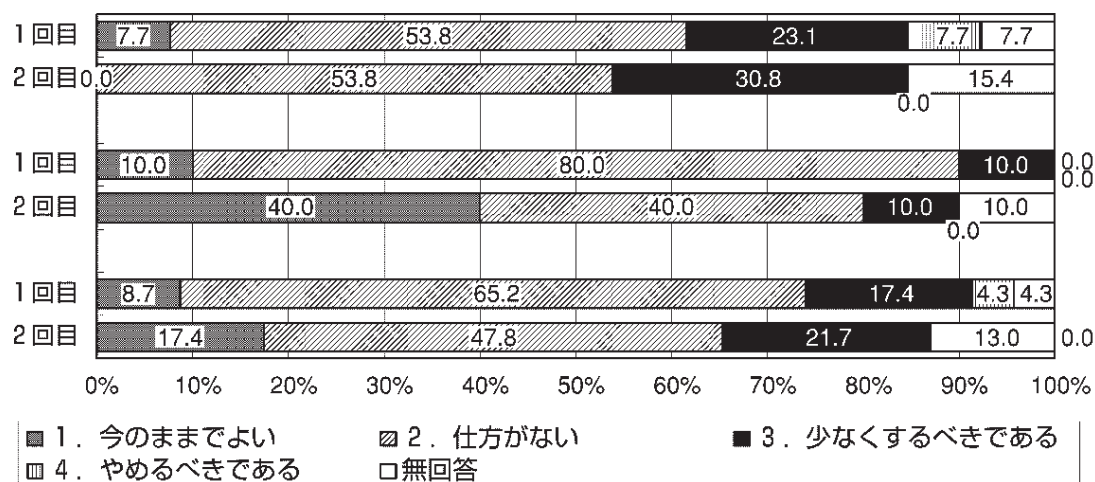


図 8-7 雑誌で本当のことと違うと感ずることがある

第3はメディアの種類別の回答では、今回はテレビよりも図8-7にみられるように雑誌への批判的な見方が高まっている。このことはメディア制作では台本づくりに大変な苦勞があり、そこでの意図や意見の一致という自らづくりあげていく文章化への体験が影響しており、改めて雑誌の問題性に気づかされた、という意識変容が見られた。このように本や雑誌の活字メディアから映像メディアへとメディア・リテラシーの体系的教育の可能性が示されたといえよう。

第4はテレビ番組の問題性への批判的能力は全体として高まっている。暴力性に対する批判的な傾向の高まりが特に大人に顕著に見られた。このことは初回の鈴木みどり氏の講演での最

後にテレビ（ビデオ）において暴力に関するものが扱われたことにもあろうが、成人において社会問題の中で自己意識や態度を自覚しなおすという作業が行われたと思われる。子ども、大人にかかわらず批判的能力としてのメディア・リテラシー育成においては、単に知識的なものだけでとらえるのではなく、社会問題としてとらえる必要があり、大人の特徴である豊富な体験や社会との直接的な関わりが必要とされるのであろう。

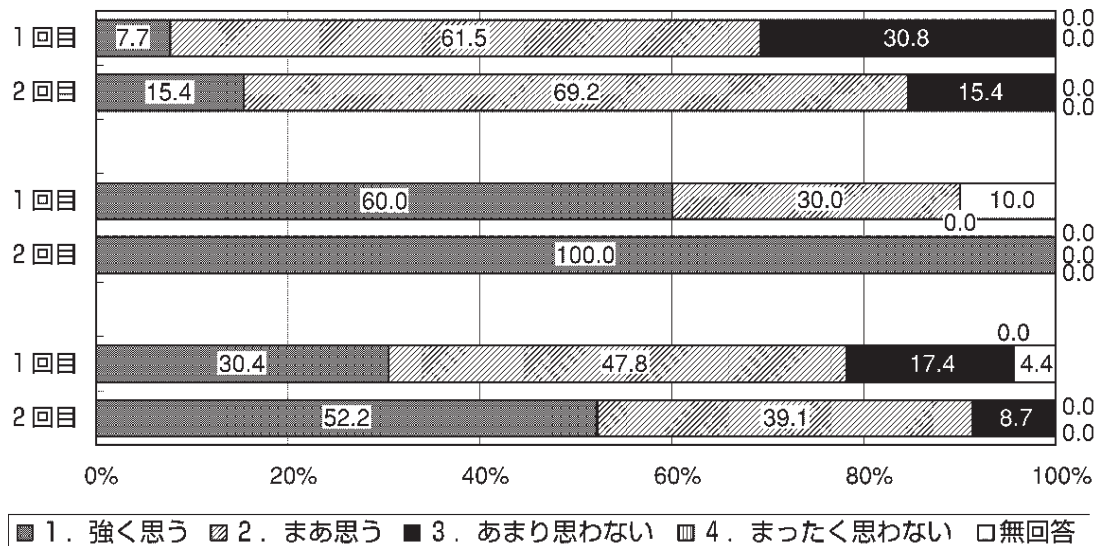


図8-8 テレビの内容には作った人の考えが入っていると思う

第5はメディアに対する意見にはあまり変化はみられないが、有害情報に対する制作側の姿勢を問う回答が増加している。これは図8-8にみられるようにビデオ作品を制作する体験の中でメディアの制作側の視点が見え、制作側が意図してつくっているという方向性が実感として理解できたからであろう。

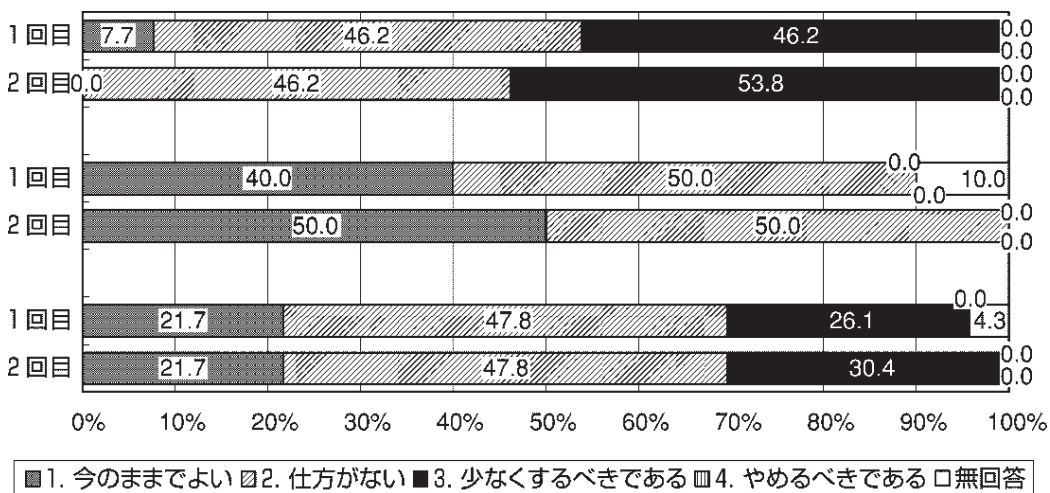


図8-9 テレビから得た内容はうそかもしれないと思う

最後の第6は、図8-9に示されるようにメディア内容問題等への対応は他の事項ほどに変化がみられなかったということである。こうした内容への批判的思考に関しては子どもよりも大人の方が若干変化が示された。インターネットの活用が増えたり、多少のメディアをいろいろ活用したり、まず自分で内容検討する必要性が内容によって、あるいは内容にかかわらず増

加しているが、時間的制約のために技術面に目がいき、作品制作中心の5回シリーズのメディア・リテラシー講座では実践意識の変革までには至りにくい。実感として無意識にメディア・リテラシーを知るといふことの重要性に関しては、反省会の意見でも出された。しかし、体系的にメディアの問題性を探る知恵のための基礎的な事項の確認の必要も認められた。今後はこういった感性の面や技術面を認識面とも組み合わせることが不可欠であり、より体系的で実践的なメディア・リテラシー講座の開拓が求められる。そして今回の研究事例では、参加者の最後の意見の中に作業集団において支援しているスタッフに対して「上司と部下の関係で私たちを見ていた」との意見があった。今後は学習者の主体的な活動を尊重し、学習者の気づきや経験と知識の共有によって学習者を支援・促進できるような専門的力量としてのメディア・リテラシーをもったファシリテーターの育成が急務である。